

春秋時代には「呉」という国があり、この南のほうに「越」という国があり、この二つの国はよく戦争をしました。だから仲の悪いことを「呉越」の関係といいます。また、仲の悪い同士が一つの船に乗る(同じ境遇におかれる)という意味で「呉越同舟」といいます。春秋時代というのは、今から2400年前ぐらいまで、約360年間続き、孔子が生まれたのもその頃です。

この「呉」の国のあった地方から、日本へ漢字がもたらされるのです。

その伝わった経路ですが、韓国を通過して、あるいは直接日本へ、まず九州へ入って来ました。日本の文化のあけぼのは九州から始まるわけですが、おそらく紀元一世紀あたりには漢字が入って来たと思われまます。

一応書き加えておくと、中国には都というのは二つあって、一つは「長安」といいます。

ところが、ちょっと西に外れていて具合が悪いというので、もう一つ都をつくりました。これを「洛陽」といいます。長い歴史の間、都がたびたび変わりますが、長安を西の都、西都といい、洛陽を東都と呼び分けています。

593年に聖徳太子が摂政となって、天皇の勢力が日本全体におよんだ頃、小野妹子を正式な遣いとして中国(隋)に遣わします(607年)。これが日本と中国の国交の始まりです。

私的な交わりというのは、呉を通じて行われていましたが、初めて堂々と中国の都に遣いが行くのです。

そうすると、漢字の読み方がまるで違うわけです。たとえば運動会の「会」という字は日本では「エ」と発音していましたが、ところが都へ行ってみると、同じ字を「カイ」と読んでいたのです。

国交が正式に始まると、長安の都の標準音というものが学者を通じて入って来ました。それで漢字の標準音という意味で、その読み方を「漢音」というわけです。従来の読み方は呉から入ってきたものなので「呉音」というように、区別をするようになりました。

ポイント:大人になると繰り返しはバカバカしくなりますが、子どもは同じことをいつまでやっても飽きることがないのです。大人はすぐ満足するけれど、子どもはできるようになればますますやりたがる、という本性の違いを親も教師も知らないことが多いようです。それで、あまりできると小学校へ入って怠けるのではないかと、自分の気持ちで子どもを押し量っているわけです。